

# フォトニクス産業のCOVID-19危機管理

コナード・ホルトン

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックとその余波で、あらゆるビジネスがこれまで想像もしなかった新しい経営管理の課題に直面している。顧客、製品、従業員、及び財務への対応といった問題にフォトニクス関連企業が戦略的に取り組めるように OSA Industry Development Associates (OIDA) は、Navigating Your Businesses Out of the COVID-19 Storm というウェビナーシリーズを主催している。第1回は4月16日に開催され、このウェビナーは誰でも視聴することができ、アーカイブも用意されている。

このウェビナーは翌週以降も開催され、危機管理における経験とそれによって得られたノウハウが議論される。このシリーズでは、グローバルサプライチェーンの管理と消火活動、レイオフ後の従業員対応、世界の半導体分野 (フォトニクス分野) への投資展望、CARES Act (Coronavirus Aid, Relief, and Economic Security Act) による財務と M & A 計画への影響、ニューノーマルという新しいビジネス環境での体制整備といった議題が取り上げられる。

米ゴーフォトン社 (Go ! Foton) の社長で OIDA 会長でもあるサイミン・カイ氏 (Simin Cai) は、次のように述べている。「多くのメンバー企業に影響を及ぼしている経営上の問題について、意見や見識を共有できるフォーラムを開催することは重要だと考えている。危機を乗り越えるために多くの利用可能な優れたリソースに加えて、業界に特化した問題も提供することは有益だと考えている」。



コナード・ホルトンは、現 Laser Focus World エディター・アット・ラージであり、Lasers & Photonics マーケットプレイスセミナーのチェアマンで、Laser Focus World の元編集長である。

OIDA は、フォトニクス企業の幹部にとって役立つと思われる経営管理に関するリソースも提供している。米ハーバードビジネススクール (Harvard Business School : HBS) の Managing through Crisis というウェビナーシリーズは実に興味深い。いくつかを視聴したが、どれも有用で優れている。HBS のケーススタディアプローチはよく知られているが、分析と意思決定の方法と同様にその実用性は、非常に明白である。そのような問題解決方法では、新しい問題が常に発生し、重要な優先事項が入れ替わるということを考慮するが、自信をもって意思決定を行うべきである。

HBS のウェビナーシリーズでは、「この危機の間、どうありたいか」と「危機後、どうなりたいか」という管理職が考慮すべき2つの重大な質問が投げかけられた。

場所、企業規模、製品ライン、及びマーケットにより、フォトニクス企業ごとにこういった問題への取り組

み方は異なる。それでも、フォトニクス業界のあらゆる企業と機関は、さまざまな基準で柔軟に対応している。例えば、独メッセミュンヘン (Messe Munich) や独フラウンホーファー ILT (Fraunhofer ILT) などの組織は、それぞれ LASER World of PHOTONICS China と AKL'20 のスケジュールを変更し、SPIE と OSA は、会議や SPIE Photonics Europe、Defense + Commercial Sensing、CLEO といった展示会を中止するかオンライン形式に移行した。このような対策は、安全に情報交換ができ業務的にも理にかなっている。

フォトニクスマーケットではどのように事業が運営されているか、情報が必要な場合は、われわれが掲載しているフォトニクス関連企業からの声明をまとめた記事を読んでほしい。従業員と顧客の安全が最優先なのは明らかだ。2020年3月末の時点で、サプライチェーンは比較的強い。防衛、医療、半導体のサプライチェーンで重要な役割を担う多くの企業は、「必要不可欠な企業」と見なされており、政府がさらに厳しいシャットダウン対策を講じても営業を続ける。

危機後の世界は、根本的だが予測不能な方法で変化するかもしれない。われわれのマーケットでは、研究、製造、マーケティング、及び営業の現在のやり方を変えなければならず、会って話をする方法にも変化が生じるかもしれない。このような変化にどう対応するか考えることで、われわれは常にそうであると思ってきた革新的な発想をするリーダーにならなくてははいけないだろう。